

長野県の埋蔵文化財情報誌



ナギジリ2号古墳出土平瓶

信州の遺跡

第18号

長野県宝に指定 佐久市東一本柳古墳出土品



佐久市岩村田に所在した東一本柳古墳の出土品は、令和3年10月「金銅製毛彫馬具」を中心^{こんどうせいけぼりばぐ}に264点が長野県宝に指定された。

この毛彫馬具は、薄い金銅板づくりで、透かし彫りや細かな線彫りにより文様を表出することが特徴である。その技法や特徴から推古朝における仏像製作集団の関与が想定され、作製年代も7世紀代に限られると考えられている。現在までに、全国で約70余例が出土しているが、馬具一式が把握できる資料は20例に満たないのが現状である。東一本柳古墳出土の金銅製毛彫馬具は、県内はもとより国内においても希少な例として位置付けられている。



信濃の小古墳にこのような馬具の優品が副葬された事は、古墳時代の終わりに佐久地域が担った地域的な特質を示していると言える。
(佐久市教育委員会 富沢 一明)

参考文献：佐久市教育委員会 2020年「再整理報告 岩村田 東一本柳古墳出土品の再整理報告」『佐久市文化財年報』28



東一本柳古墳出土 馬具金具類 上左長さ：9.6cm 佐久市教育委員会 提供



松本市真光寺遺跡発見の古墳 河原石により構築された石室



古墳SM01全景 南から



真光寺遺跡は、梓川右岸の河岸段丘上の2段目（森口面）に立地している。今回の調査で、旧波田町内で初めて古墳を発見した。本古墳は、南側開口の横穴式石室を伴う円墳で、墳丘や石室、周溝が残っていた。墳丘・石室ともに上半部が削平された状況で発見されたが、規模は、墳丘径が南北約12.5m、東西約11.5mで、周溝の幅は約1.5m～2mであった。横穴式石室の全長は約7.5mで、幅は奥壁で1.1m、入口部で1.85m、石積みは、残存高約0.7mであった。石室の中は、袖石や梱石または框石跡と考えられる掘方によって、奥から玄室・前室・羨道に約2.5m間隔で区切られていた。

石室の構築過程では、丸みを帯びる石材を安定させながら積みあげるため、裏込めとして小礫や粘土などを石材の間に入れていることが分かった。また、石室に使用した石材は、大小はあるものの多くが楕円形の花崗岩や砂岩で、発掘現場近くを流れる梓川から採取したと考えられ、現在も河原では同じような石材をみることができる。本古墳の規模や石室の構造について、松本市新村の秋葉原古墳群や安塚古墳群でよく似ているものが確認されており、この地域の古墳の一つの特徴といえる。

本古墳からは、須恵器や鉄製品が出土した。本古墳の石室内及び入口付近（前庭部）から、坏・蓋・壺・甕・平瓶などさまざまな器種が出土した。鉄製品は、鉄鏃が出土している。

本古墳の築造年代を考える鍵として、先述の須恵器がある。主に7世紀末から8世紀初めのものであると考えられ、その年代観は、秋葉原古墳群や安塚古墳群とも合致している。この須恵器が出土したことだけで、この古墳の築造年代を決定することは危険性をはらんでいるが、大化の薄葬令が出された7世紀後半以降は、全国的に古墳が造られなくなる時期である。そのような時期に、特徴的な石室を持つ古墳を造営した集団については、今後さらなる検討が必要である。しかし、仮にこの時期に築造した古墳とするならば、7世紀後半以前の古墳が新村地区にないことを踏まえて、現在の新村地区を開発した最初の集団の墓が秋葉原古墳群や安塚古墳群、そして真光寺遺跡でみつかった古墳であり、これらは集団のランドマークであった可能性が考えられる。

（春日 皓介）



横穴式石室 前室から玄室を見る



石室の石材を安定させるための工夫



飯田市座光寺石原遺跡ナギジリ2号古墳 再び姿を現した古墳



ナギジリ2号古墳の横穴式石室

ナギジリ2号古墳は、飯田市座光寺の土曾川中流域に位置する。1997年に飯田市教育委員会がナギジリ1号古墳を調査しており、本古墳はその南東75m地点でみつかった。1955年に刊行された『下伊那史』は、本古墳を「第一号墳の南六十六米を隔てた道下の水田」に存在した古墳であるとしたうえで、「現在は全く形を存しない」と記しており、既に失われている可能性が高いと考えられていた。しかし、地権者が先代から聞いたという位置情報をもとに、その場所を掘り下げたところ、地表下30cm程度の高さで天井石を検出した。^{いんめつ}湮滅したかに思われていたナギジリ2号古墳が、再び姿を現した瞬間であった。



石室内の石敷き



平瓶出土状況

調査の結果、本古墳は直径約14mの円墳であることが判明した。周溝は幅約3.5～4m、最大深度は約0.5mである。石室規模は長軸約7m、最大幅2.2m、入口幅1.4m、側壁の石は4～5段積み、高さ約2mをはかる。平面形は無袖式で、^{しきみいし}柵石などの玄室と羨道を隔てる施設はみられなかった。ただし、奥壁より5.8m付近で最下段の石がやや内側に配置されて石室幅が狭まっており、このあたりを境界とみることもできる。石室内には敷石が施され、鉄刀や鉄鏃・耳環などの金属製品やガラス小玉、完形の平瓶が出土した。いずれも側壁ないし奥壁寄り出土しており、埋葬当初の原位置は留めていないとみられる。入口部では、閉塞石と重なるようにして土器や金属製品がみつかったっており、追葬の際に移動されたものと推測する。出土遺物は、7世紀前半から8世紀初め頃の所産である。ナギジリ1号古墳は6世紀後半から8世紀前半までの間に3回の追葬を想定しているが、本古墳についても何度かの追葬があったと考えてよい。

『下伊那史』には、本古墳や上述のナギジリ1号古墳のほか4基の古墳の名が記されているが、このうちの3基については昨年度と本年度の調査で、すでに存在しないことを確認した。失われていく古墳が数多くあるなかで、今回発見されたナギジリ2号古墳は、古い時代を現代に伝えてくれる貴重な存在といえるだろう。（伊藤 愛）

参考文献：下伊那誌編纂会1955『下伊那史 第二巻』
飯田市教育委員会1997『ナギジリ一号古墳』

再整理により発見された貴重な資料1

木島平村根塚遺跡出土品 朝鮮半島南部で焼かれた「三韓瓦質土器」 さんかん がしつ ど き

木島平村は埋蔵文化財を重要な資源の一つとして保存・活用していくため、令和2年度から再整理作業を行っている。主に村内の弥生時代遺跡を対象として、出土品の現状確認や見直しを進めている。

中心的存在の根塚遺跡では、朝鮮半島南部との関係を示唆する鉄剣が3振り出土しているが、今回の再整理では、その謎に迫る新発見があった。原三国時代に朝鮮半島南部で焼かれた「三韓瓦質土器」が確認されたのである。この資料は東日本の、さらに内陸部から初の発見という驚きもあって、村の新しいトピックとなった。

この土器は弥生時代後期において、半島から対馬、壱岐、北部九州にかけて出土し、九州以外では、山陰の山持遺跡で発見例があるとされる。さらに対馬を除いて墓に伴うものではないため、日常において使用された土器だったと考えられている。これは根塚遺跡でも同じ扱いで、出土場所は墳丘墓ではなく、丘陵を下りた先の旧河道からであった。

土器は破片が9つ。器種は「無文広口壺」、「縄目タタキ広口壺」、「壺以外の不明品」の3種類が確認されている。壺は穀物や薬を運ぶために用いたそうだが、「不明品」はわずか2mmの厚さしかない小片で、今後の検討課題である。土器の特徴としては、窯の中で密閉し、低温で焼くため灰色を帯びるほか、軟質でとても吸水性がある。一見すると焼成不良の須恵器のようですらある。この資料について、はじめに朝鮮半島系土器の可能性を提起したのは山本孝文氏であり、調査で鑑定したのは武末純一氏と山崎頼人氏である。県内外の多くの方々にご助力いただけたことは、資料にとって幸運であったといえよう。この「三韓瓦質土器」をはじめ、鉄剣や墳丘墓を改めて紹介できるよう、報告書の刊行を目指して進行中である。東日本と朝鮮半島との関係という大きなテーマに関わる遺跡であることを、改めてアピールできるようにしたい。

参考文献：武末純一 1991 『土器からみた日韓交渉』 学生社
木島平村教育委員会 2020 『県指定史跡 根塚遺跡』



再調査により確認された三韓瓦質土器
木島平村教育委員会 提供



木島平の塚群 手前中央の盛り上がりが根塚遺跡 木島平村教育委員会 提供

諏訪市小丸山古墳出土品 判明した推古朝の盟主の副葬品



銀象嵌の大刀刀装具 諏訪市博物館 提供



小丸山古墳は大正8年に地元住民らが横穴式石室内を発掘して多くの副葬品が出土した。馬具など一部は東京帝室博物館（現 東博）へ納められ、その他は住民らが保管してきた。昭和48年の中央道建設、同63年の工場建設により墳丘は削平されて、古墳そのものは残っていない。

出土品については古く『諏訪史』第1巻（大正13年）にも掲載され、昭和54年には地元住民所有分が市有形文化財に指定されている。そのようななか、平成25年から28年にかけて中央道発掘分と住民所有分が諏訪市にそれぞれ譲与・寄贈され、古墳出土品は市と東博の2か所にまとまった。市では指定文化財を含む金属製品の保存処理を進めるとともに遺物の観察や分析も実施し、その結果さまざまなことが新たに分かってきた。

まず、市内初となる銀象嵌装大刀の確認である。大正時代の発見から100年を経て精緻な文様が目視できる形となった。次に、小札甲^{こざねよろい}については一領分があるかという量がバラバラになった状態だったが、丹念に分類を行った結果、およそその全体形が判明し、なおかつそれは類例のほとんどない珍しい形式であることが分かった。古墳と同時代の6世紀末で、奈良県明日香村の蘇我氏^{あすか}建立の飛鳥寺塔心礎^{あすか}埋納品や馬冑^{うまがぶ}や玉虫装飾付心葉形杏葉^{たまむし}などが出土した福岡県古賀市の船原古墳1号埋納坑の小札甲との共通点がみられる。

馬具は東博に素環環状鏡板付轡^{そかんかんじょうかがみいたつきくわ}などがあるが、鉄地金銅装の十字文透心葉形鏡板^{てつじこんどうそう}や楕円形鏡板の可能性のある破片が新たに確認され、金銅装を含む3組以上の馬具が副葬されていた可能性がある。十字文透心葉形鏡板は「額田部」氏族や推古天皇に関わりが深い馬具とされておりこの点でも注目される。

須恵器は破片ばかりだが定量あって、猿投窯産や在地窯的なもののほかに、頸部補強帯甕^{けいぶほきょうたいかめ}という北関東型須恵器があることが分かった（群馬県産と推定）。県内でも千曲川流域に出土は知られていたが、分水嶺を越えての出土は調査研究の視野を「東」にも向ける必要性を教えてくれた。

今後については、保存処理事業の完了と再整理およびその報告を行うとともに、展示会などを開催することで多くの方々に新たな発見について知っていただく機会をもちたい。

（諏訪市博物館 児玉 利一）

参考文献：塚本敏夫 2020年「法興寺塔心礎埋納品が語る古代史」『日本仏教はじまりの寺 元興寺』吉川弘文館



鉄地金銅装十字文透心葉形鏡板 諏訪市博物館 提供



頸部補強帯甕 諏訪市博物館 提供

安曇野市穂高古墳群B27号墳 墳丘はどのように築かれたか



穂高古墳群B27号墳（以下、「B27号墳」とする。）は、北アルプス山麓に広がる別荘エリアの山林にある。穂高古墳群は6世紀後半から7世紀初頭に築造がはじまり8世紀前半まで継続利用された後期群集墳で、現在80余基が残っている。これらの古墳は、まとまりごとにA～Gの8群に区分され、B27号墳がある天満沢の両岸の古墳はB群に分類されている。穂高古墳群は、岩陰に築かれたD1号墳（魏石鬼窟）を除いて、全て山麓・扇状地の斜面に立地する円墳で、無袖の横穴式石室をもち、墳丘・石室の構築過程解明が課題のひとつとなっている。



今回、B27号墳の所在する土地の売買に際し、古墳の現状保存を目的として安曇野市教育委員会が主体となり墳丘の範囲確認調査を実施した。調査は、幅70～100cmのトレンチを石室から裾部方向に放射状に3か所、裾部に2か所設定して、手作業で基盤まで掘削し、土層確認を行った。調査には、令和3年5月下旬から7月上旬のうち断続的に約20日を費やした。



B27号墳全景（南東から） 安曇野市教育委員会 提供

B27号墳のある天満沢両岸には、花崗岩が風化した砂礫層が広く堆積している。この砂礫は鮮やかな褐色を呈し、「有明^{ありあけ}」というこの地域名を冠して、通称「有明砂^{ありあけすな}」と呼ばれている。有明砂の基盤層までトレンチを掘り下げたところ、B・Cトレンチの断面に、とともしまりの強い黒色土層と褐色の有明砂を含むシルト層、これらをブレンドした黒褐色土層が美しい縞状の互層となって現れた。土層観察の結果から、これらの縞状の層を壁体構築にかかわる1次盛土と判断し、さらにこの1次盛土を構成する各層の平面分布から「パッチワーク状の盛土・転圧（版築）」を繰り返して墳丘を築いたことも分かった。



Bトレンチ断面 安曇野市教育委員会 提供

また、今回の調査では石室側壁を墳丘側から掘削したため、側壁の裏には裏込めの石や控え積みがあるものと想定していた。しかし、この予想に反して、盛土内には礫がなく、壁体の裏込めに石が使われていないこと、控え積みがないことが判明した。

今回の調査によって、B27号墳は、墳丘径約15mの円墳、無袖の横穴式石室、開口部幅2m、石室長7.5m、側壁の残存高は最大で1.7mとなることがわかり、穂高古墳群の墳丘・石室構築方法を解明する手がかりを得た。また同時に、B27号墳の価値の一端を明らかにすることで、現状保存について関係者の理解を得ることもできた。

（安曇野市教育委員会 土屋 和章、臼居 直之）

ろうしょうば
伊那市老松場古墳群1号墳 地元小学校児童の前方後円墳発見から保存調査へ

老松場古墳群は、天竜川左岸、三峰川左岸の段丘上にあり、東春近地区に南北に分布する古墳群の最北端に位置する。7基からなる本古墳群は、これまで古墳時代後期に造られたとされ、1号墳は円墳または双円墳とされていた。しかし、平成27年の地元小学校児童と伊那市教育委員会による測量調査によって、4世紀末から5世紀初め頃の前方後円墳である可能性が出てきた。そのため、古墳群の全容解明と今後の保存・活用を見据えて、発見から1年半後の平成29年、関西大学文学部考古学研究室と伊那市教育委員会による調査を開始した。

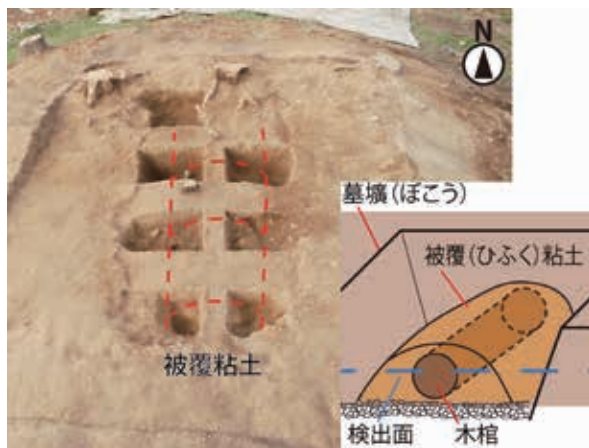
平成29年度の第1次調査では古墳群の測量調査を行い、1号墳は墳形から4世紀末から5世紀前半の前方後円墳であることを確認、平成30年度の第2次調査では1・2号墳のトレンチ調査を行い、2基ともに存在しないとされていた葺石を検出した。令和元年度の第3次調査では1号墳を広範囲で調査し、墳丘斜面を縦・横に25～50cmの石材で区画後、その間に15cmほどの川原石を埋める工法や、全長約34mの前方後円墳と確認した。今年度の第4次調査は1号墳墳頂の調査を行い、南北約5.3m、東西約2.5mの隅丸方形でほぼ南北に軸をもつ墓壇を検出した。被覆粘土は墓壇上面から約30cm下で確認した。残存状況は良好で、埋葬施設は未盗掘と見られる。墳丘構造や葺石の構築方法、埋葬施設から、築造は5世紀前半の可能性が高い。市域初調査となる、伊那谷特有の低墳丘円墳である2号墳では、直径約12m、高さ約1.1mの墳丘に、深さ約50cmの周濠と、北東に軸をもつ長辺約3.8m、短辺約3.0mの墓壇を新たに検出した。周濠から多数の須恵器・土師器片が出土し、5世紀後半頃の築造と見られる。

本古墳群は小学生が前方後円墳を新発見したということで注目され、その後も地元住民による整備・活用が継続されている。今後は市指定史跡とし、県の指定も目指したいと考えている。市内には上伊那でも突出して多い111基の古墳がある。特に天竜川左岸段丘上には南北10kmに渡り破壊を免れた古墳が70基以上も残り、当時のままの状態を今も見ることが出来る。老松場古墳群の保存・活用を通じて、周辺古墳群も地域の宝として調査し、周知していきたい。

(伊那市教育委員会 瀨 慎一)



葺石検出状況 伊那市教育委員会 提供



1号墳 埋葬施設の検出状況 伊那市教育委員会 提供



2号墳 墓壇・周濠の検出状況 伊那市教育委員会 提供

八丁鎧塚1号古墳は土が豊富で盛土古墳が築造されていた地域に、5世紀前半に突然人頭大の石を運び込み、石だけを積み上げて築造された積石塚古墳である。埋葬施設には少なくとも方格規矩四神鏡^{ほうかくきくしんきやう}1点、碧玉製石釧^{へきぎよくせいしきく}2点、南海産の貝を加工した列点文スイズガイ製貝釧^{れいてんぶんすいずがいせいばいしん}1点や広田型ゴウホラガイ製貝釧^{ひろたがたごうほらがいせいばいしん}3点以上ほかが副葬されていた。

列点文スイズガイ製貝釧を副葬品とした古墳は、八丁鎧塚1号古墳、兵庫県新宮東山2号古墳（方墳）、大分県世利門古墳（円墳）、熊本県佐佐山古墳（円墳：前方後円墳の可能性）の4古墳、広田型ゴウホラガイ製貝釧を副葬品とした古墳は、八丁鎧塚1号古墳、新宮東山2号古墳、世利門古墳、大分県臼塚古墳（前方後円墳）の4古墳である。

さらにスイズガイやテングガイのように鉤状突起がみられる有鉤貝釧^{ゆうこうばいしん}が出土した古墳は、八丁鎧塚1号古墳（スイズガイ）、静岡県松林山古墳（スイズガイ：前方後円墳）、山梨県甲斐鉤子塚古墳（スイズガイ：前方後円墳）、島根県軍原古墳（テングガイ：円墳？前方後円墳の可能性）の4古墳で、少なくとも八丁鎧塚1号古墳以外の2古墳は前方後円墳である。

入手が非常に困難であったと思われる南海産の貝を加工した貝釧を埋葬施設へ副葬した古墳は、列島全域を見渡しても非常に限られ、副葬古墳の割合が盛土の前方後円墳に多いことを考えれば、南海産貝釧の所持はヤマト王権との繋がりや被葬者像を考えるうえで、非常に個性的な副葬品であったことが窺える。

積石塚古墳の築造意図を考えた場合、「大陸起源説」、「環境自生説」が考えられるが、「大陸起源説」のその根底には「石中誕生譚」^{せきちゅうたんじやうたん}（石から生まれて石に帰る）に関わる石中葬と称すべき埋葬観念が存在する。

これらから八丁鎧塚1号古墳に埋葬された被葬者は、ヤマト王権から前方後円墳の築造を許されながらも、あえて人頭大の石を積み上げて高句麗積石塚を思わせる積石塚古墳を築造することにこだわりをもった人物であったと考えられる。

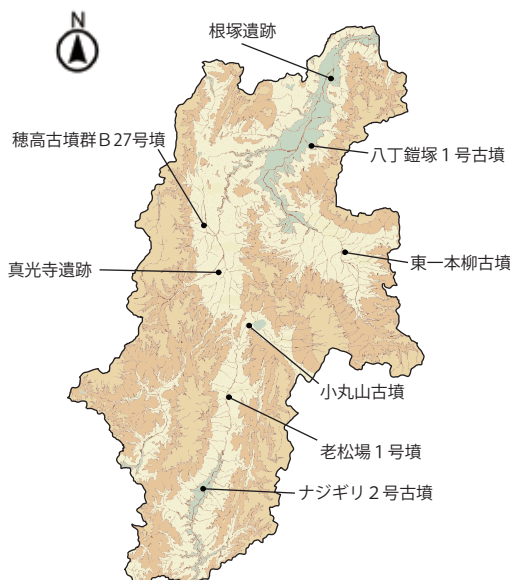
（西山 克己）

参考文献：木下尚子 2000年「第2節 八丁鎧塚1号墳スイズガイ・ゴウホラガイ貝釧について」『長野県史跡 八丁鎧塚古墳』須坂市教育委員会



八丁鎧塚1号古墳出土
上：列点文スイズガイ製貝釧（有鉤貝釧）
下：広田型ゴウホラガイ製貝釧
文献 木下 2000 から転載

本号で掲載した遺跡位置



編集後記

本号は、近年長野県内の文化財保護行政に携わる研究者による、資料の再整理や発掘調査によって、新たな発見や研究成果が相次いだ弥生時代終末から古墳時代終末にかけの墓や古墳について特集した。本号に掲載した地道な調査・研究成果をきっかけに、更なる新たな発見や研究の進展に期待したい。

（西山克己）

（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
<https://naganomaibun.or.jp/> 印刷：奥山印刷工業株式会社

この冊子は、令和3年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。